

抛げやり心 : 文苑

著者	片山, 元長
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 8
ページ	2 7 - 2 8
発行年	1912-12-20
その他の言語のタイトル	抛げやり心 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/6422

若き日

日

生

「しんさんと見惚れるやうな」小姓振松蔦が演る槍の權三
武夫原に月見草咲く六月の晴れたる空を阿蘇の霾降る
加藤社の櫻の老木紅葉して十月の日のうらゝかに照る

都大路

ゆめみるひと

智恩院のつめたき朝の石段にそこはかとなき悲しみもちる
月夜よし舞子の濱の水際の白くふるふを友とながむる
わが胸は夕日の光あかあかと空にうつるをたねす夢みる

抛げやり心

長

生

物を追ひ只ひたすらに物を追ひきたなき心ふと燃ゆる折
器みな打ち碎きては破片みな拾ひ集めて楽しむ男

紅莓盛りたる今宵うら淋し銀の器の白光のやみ
わだつみの暗きそこひに住むと云ふ眼のなき魚に似たるか吾は
ザクとあて吾が白玉の齒にしみぬある初秋の夜の林檎の

此

曉

一ノ二、齊藤護國

此曉悲風落枕邊。夢醒床上淚潸然。一蟲終夜鳴何處。燈影憧憧御影前。

予友在北韓一夕見寄手簡中有詩數首次韻却寄

夜涼如水滿城秋。銀漢斜流通斗牛。此夕雁來傳舊韻。青燈挑盡五更頭。

此

夜

此夜秋風入故園。籬邊蟋蟀欲消魂。銀河萬里天如水。雁不成行月一痕。

長

相

思

碧空一輪月。耿耿照我牀。懷友不能寐。夜坐引愁長。出室步庭中。皎潔滿庭霜。冷風入北垣。
凜々拂衣裳。婆娑是何影。仰見鳥過堂。孤雁數語落。翻々西北翔。我願爲彼鳥。此夜西北行。
西北行何處。故人在異鄉。欲飛無羽翼。欲翔不知方。泣涕沾衣領。徘徊又傍徨。我心不能言。
何堪獨斷腸。斷腸續歌哭。一一訴穹蒼。穹蒼胡不答。我心今欲狂。唯有嫦娥照。終夜守書房。